続 煙草 と わたくし

川上 宏

毎月守谷に集まる水源地のメンバー（ノンベー）に、愛煙家が二名いらっしゃる。峯雲翁こと横山氏と吉澤編集長。今更、喫煙の健康におよぼす害悪と人生における禁煙の効用を説いたところで、おそらく余命二十数年（？）のご老人たちを説得できる自信もないので、ここではふれないつもりです。

一九五一年十二月、わたしはこの世に生を受けた

わたしの父は大変なヘビースモーカーで、アルコールをたしなまない分、お小遣いのほとんどが、煙草に消えたとは母の回想。

幼い私に記憶があるのが〈いこい〉と〈ＳＨＩＮＳＥＩ〉。なかでも黄土色の地に五本のラインと、四分休符の〈いこい〉の意匠が、印象に残っている。

当時は住宅事情も悪く、長屋然の狭い六畳間で誰に遠慮をすることもなく、父は喫煙していた。嫌煙権とか副流煙なんてことばもなかった時代、愛煙家には、良き時代だった。

そんな劣悪な環境で過ごした六十年代だったが、母も私を含めて妹も、癌を患うこともなく、今まで健康に過ごせたのはとても幸運だったのかもしれない。

父は平成四年八月、肺癌で鬼籍に入った。八十一歳だった。

一九五九年　たばこは動くアクセサリー

昭和三十年代、スリーエーという赤いパッケージに包まれたライトシガレットがあった。販促ポスターでは、赤を基調にした背景に、池内淳子や香川京子、司葉子が、ほっそりとした白い指に煙草をはさみ、微笑んでいる。キャッチコピーは〈たばこは動くアクセサリー〉。

小学生時代、図画工作が得意で、教育委員会が主催する交通安全、非行防止や火災予防のポスター、標語コンクール等に応募。広告には昔から興味があった。〈たばこは動くアクセサリー〉というコピーも、覗いてはいけない大人の世界を妄想させた。

いっぽうでは、鉢巻きをした髭面のオヤジ（耳に煙草をはさんでいる！）のアップ写真に〈今日も元気だ煙草がうまい〉という色気とは正反対のガテン系ポスターもあった。非喫煙者からは〈今日も元気だ、タバコ買うまい〉などと揶揄されてもいた。

一九六三年十一月　テレビアニメ〈エイトマン〉の放送が始まった

意外かもしれないが、エイトマンは喫煙常習者だった。「エイトマン 煙草」で画像検索すれば、煙草を咥えたエイトマンが現れる。エイトマンの動力源は小型原子炉。メルトダウンするのを防ぐために煙草型強化剤（冷

却剤）を服用しなければならない。それも一日四回。
煙草はおじさんたちの活力源でもあった。エイトマン、吸えなくなるとパニックになり、ニッチもサッチもゆかなくなると貯水槽に穴をあけて水をかぶったりして、喫煙時代のわたしそのものだ。

一九六七年冬　その日は朝から寒かった

都立忍岡高校の朝礼。池田校長の講話が始まった。私は思いっきり冷たい空気を吸い込んで、それから胸の万年筆を取り出して煙草に見立て、真っ白な息を大空に向かって吐きだした。
池田校長が話を途中でやめて、いきなり顔を私のほうに向けて怒りの声をあげた。
「誰だ、煙草を吸う真似をしている奴は！」

一九七三年一月　K澤君が大学を中退した

K澤君はいつもパイプを持参し、時々ポケットから金属缶に入った煙草葉を詰めてプカプカ吸っていた。彼は山形県出身で私と同じ学部、学年、サークルだった（陶芸）。入学当初から、学業には全く興味を示さず、授業料は滞納、成績は不可のオンパレード、何を考えているのか誰にも分からなかった。
後期の期末試験が始まる頃、大学に退学届けを出し、中央線沿線にあった下宿を引き払い、茨城県の笠間市に引き込んでしまった。
何十年も音沙汰がなかったが、笠間焼の陶芸家リストを眺めていたら、偶然彼の名を見つけた。

一九七四年夏　ハイライトのより旨い味わい方を発見した

当時は、煙草店に行くと、オイルライター、ガスライターなどと一緒にさまざまな喫煙グッズを売っていた。その中にシガレットホルダーがあった。特殊繊維を使ってニコチン、タールを除去するもの、中が空洞になっていて、中で気流を発生させて高速で内壁にあて、ニコチン、タールを付着させてまろやかな味にするものなど、いろいろあった。　いずれもカートリッジ式で、カートリッジは使い捨てだった。
マルマンという喫煙具メーカーが販売しているシガレットホルダーに、ハイライトを装着して吸うと、雑味がなくなりふくよかでマイルドな味になった。
数日後、口内に痛みを感じ、医院で診てもらったら、口内炎と診断された。喫煙量が増えことも一因だが、直径が二ミリメートルくらいの穴からピンポイントで煙を大量に吸い込んだためだった。

一九七三年春　汽車旅行をした

山陰ワイド周遊券を手に、Ｄ５１が牽引する下り列車に乗り込んだ。車

内には地元の高校生が数人と、行商のおばさんだけ。誰に遠慮をすることなく、ボックスシートに陣取った。キオスクで買ったハイライトと缶ビールを窓際に張り出した小テーブルに置いた。汽車がボオッと汽笛を鳴らし、ゆっくりと動き出すのを合図に、缶ビールを開け、ハイライトの封を切った。一本目の煙草に火をつけ、煙を思いっきり肺の中に吸い込んだ。旨い！至福のひとときとは、こういうことをいうのだろう。窓外に目をやると、煙が後方に後方にと流れてゆく。少し開けた窓からは、煙草の煙が外に吐き出され、やがて汽車の煙と絡みあい消えていった。

やがて終着駅に近づいた。客が少ないことを幸い、窓をさらに押し上げ、なごりを惜しんで顔を窓から突き出した。コークスの細かい粒が顔にあたる。目に入らぬよう瞼を閉じて、汽車の吐き出す煙を思いっきり吸いこんだ。

下関駅に到着すると荷物をまとめ、上り山陽本線のホームに向かった。すれちがう人々がなぜか私の顔をじろじろとみているような気がした。女子中学生らしいグループは、口元を両手で隠して笑いをこらえている。

「この俺、有名な芸能人、コント芸人とか漫才師にでも似ているのかな」

「まてよ二十年以上生きてきたけど、そんなこと言われたことないなあ」

「ひょっとして、山口県出身のご当地スターと似てるのかな」

勝手に妄想を膨らませながら、しばらく我慢をしていたトイレに入った。洗面所の鏡に映った己の顔……。

蒸気機関車の吐き出した煤と油煙で、顔が薄黒く汚れ、江戸川乱歩〈少年探偵団〉の前に現れた、印度人の悪党のようだった。

あわててタオルでゴシゴシこすってみたが、重油を含んだ煤は容易には取れず、煤で汚れた顔のまま、次の宿泊地に向かった。

一九七三年春　益子で陶芸サークル合宿をした

栃木県の益子町で制作合宿、隣町の芳賀町青少年センターに寝泊まりした。センター売店では煙草を販売しておらず、自動販売機も置いてなかった。センターは山の中にあり、町まで買いに行く交通手段がなかった。当時はコンビニなど、もちろんなかった。

夜、モク切れに陥った喫煙者たちの、壮絶なバトルが始まった。恫喝して一年生の煙草をとりあげる者、入浴時間に脱衣場に忍び込み、ジーパンのポケットから煙草をくすねる者、なかには一本五円の煙草を三十円で転売する者まで現れた。土壇場で本性をあらわす人間の醜さと、ニコチン中毒の怖さを知った。

一九七四年十二月　禁煙を宣言した

K股君の下宿に集まってマージャン大会を行った。

前日に決意し、友人の前で禁煙宣言をしていたが、ダウンタウンブギウギバンドの〈スモーキング・ブギ〉が、ラジカセのスピーカーから流れると、気持ちが動揺し、禁煙宣言は半日で頓挫した。

一九七五年七月　晴れて社会人

某メーカーに就職が決まり、三か月の自宅待機を経て七月、新社会人としてスタートした。

一か月間の新人研修を終えて、当時の十条営業所に配属が決まり、営業一課一係の営業所員になった。

最初に得意先を覚えるため、営業車（カローラ）に乗り込んだ。運転は入社三年目のK森先輩、O係長は都合で加われず、I課長と三人での得意先訪問となった。

営業の心得とか、業界の動向など、I課長のありがたい話に耳を傾けていたが、無性に煙草が吸いたくなった。狭い車内で煙草を吸っている人は誰もいなかったが、禁断症状がピークになり、こっそり煙草に火をつけた。ウインドウを少しだけ開けて、煙を逃がそうとしたが、ダンプカーとすれ違った瞬間、風が逆流、車の中を大量の煙草の灰が舞って、課長のスーツに降りかかった。

一瞬の沈黙。そして課長のひと言。「川上君、このまま車から降りて帰りなさい」

I課長は大の煙草嫌いだということを後で知った。「吸ってもいいですか」の一言が言えず、車内で煙草を吸い出した大馬鹿新入社員。会社員人生の第一歩を、大黒星でスタートすることになった。

一九八五年四月　中島みゆきのアルバム〈お色直し〉発売

このアルバムの中にずばり〈煙草〉という曲がある。煙草の煙のスクリーンに、あなたとあの娘の幸せを見つけ、忘れて帰った煙草をいつか返そうと思っていたら、湿気っていたという、失恋ソング。

一九八三年三月発売のアルバム〈予感〉の〈髪を洗う女〉では、煙草の煙と、お酒の香りと、あいつのすべてを流すため、髪を洗い続ける女が主人公。

もう一曲、〈涙-Made in Tears〉。メッキだらけのケバい喫茶店で、目にしみる煙草の煙に「今ごろどうしておいでだろうか」と嘆息する。

〈向こう横丁のタバコやの可愛い看板娘〉をはじめ、煙草がでてくる歌謡曲、恋はいつも未成就。

♪煙草ふかして口笛吹いて　あてのない夜のさすらいに（昭和二十二年菊池章子〈星の流れに〉）

「歌謡曲　煙草」でNET検索したら出てくる出てくる、百や二百では収まらなそう。五～六百曲はいくのではないか。

♪折れた煙草の吸殻で、あなたの嘘がわかるのよ（中条きよし　うそ）

♪煙草に火をつけてください（五輪真弓　問わず煙草）
♪ベッドで煙草を吸わないで（沢たまき　ベッドで煙草を吸わないで）
♪タバコの煙り　目にしみただけなの（日野美歌　氷雨）
♪煙草をつけようとマッチをするたびに（メイン・テーマ　薬師丸ひろ子）
こんなレア曲もあった。
♪おねがいよ　別れ煙草はやめて（みさきひろ子）
フォーク歌手の吉田拓郎だって、
サヨナラの文字を作るのに　煙草何本ならべればいい（外は白い雪の夜）

「シガレット　不幸なわたしの　アクセサリー」

一九九七年十二月　禁煙を決意